
家事手伝い、異世界へ行く

Rail

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

家事手伝い、異世界へ行く

【Z-コード】

N68870

【作者名】

Rail

【あらすじ】

しがない家事手伝いをしていた主人公は、ある日気がつくと異世界に召喚されていた。彼女に与えられた役目とは……！？

お手軽異世界召喚です。

ふつとめまいがしたと思えば、目の前にはどう見ても見た目日本人ではないむさい男が三人と、『つい女』が一人いた。

周りは明かり一つない深い森。夕方というわけではないだろうが、木々がうつそうと茂つてるので薄暗い。

そんな場所に私はなぜかジーンズに白色のカットソー、そして手にスーパーのビニール袋という格好で立っていた。かなり場違いである。

「……これが？」

「ああ、そのはずじゃが」

田の前の男二人が会話する。不審そうに私を見ているのは筋肉だるまという呼称がふさわしい大きな男で、身長は一メートル近くあるんじゃないだろうか。肩当てやグローブなどの防具らしきものをしている。もう一人は髪もじやのローブの男。口調的には年齢がいってそうだが、フードと髪の間から見える肌は思いのほか張りがあるのでそこそこ若いと思われる。筋肉だるまよりは小柄だが、成人男性としては平均的な身長である。おとぎ話の魔法使いのような木の杖を持つている。

「あの、『』には一体？ あなた方は？」

なんとなくだが、私をこの場に連れてきたのはこの人間たちだと思つたので尋ねてみる。するとそれまで黙つていた男がすつと前に出た。

身長が高く、薄暗い中でもわかるくらいに眼力が強い。精悍な顔

ついで全身を鎧で覆つた姿は騎士のようである。この男がリーダーなのだろう。そういう風格がある。

「突然お呼び立てして申し訳ない。俺はリチャードと言つ。あなたにぜひとも協力していただきたく、ヒューズに無理を言つてあなたを召喚した。こちらの用事が済み次第、あなたは元の世界にお返しする」

おやおや、これはもしかして異世界召喚つてやつですか。道理でコスプレにしては使い込んでる感のある防具のはずだよ。しかも彼らの見た目は日本人とは程遠いし。

さつきまで私スーパーの前にいたものね。買い出し終わつたから家に帰ろうとしてたものね。一瞬でこんなところにワープだなんて、超常現象としても不思議じやないよね。

きょう日の異世界召喚は二十歳すぎの家事手伝いまでも召喚するのか。時代の流れを感じるなー。異世界召喚の歴史なんて知らないけれど。それに用が済んだらすぐさよならなんて、なんともお手軽じやないか。

私が感慨にふけつていると、四対の視線を感じた。あわてて彼らに意識を戻す。

「それで、私が協力することとは?」

いかにも勇者だか英雄だかご一行っぽいのに呼ばれるとは。しかも城ではなく森の中。

異世界の人間を呼んでまで解決しなければならない」ととは一体何なんだろうか。

「ああ、実はとても大切なことなんだ」

リーダー格の……名前なんだっけ。リ、リツサーン？ あ、リチャードか。まあ彼が深刻そうな顔で言つ。他の面々もとてつもなく真面目な顔をしていた。

「言つちゃあなんだが私は、ぐぐく普通の家事手伝い。出来る」とは限られているのだが。

「あなたには……我々の夕食を作つてほし」

「……………夕食、ですか？」

「ああ、夕食だ。出来れば明日の朝食の準備も」

「うん、これは言つてもいいよね。

「自分たちでしてください」

「そこを何とか！」

「わしらを飢え死にさせる氣か！」

「死活問題なんだ！」

「お願い、おいしいご飯が食べたいの！」

私の一言に、それまで黙つていた他の三人まで口々に食いつ下がつてきた。

「なんでやねん。

「食事の準備ぐらい自分たちで出来るでしょ！？ 食えりやいいじゃないですか」

「まづい食事だつたら明日の活力につながらないんだよー。」

「もうずずっとまともなご飯食べてないのー。」

特に女性の声には鬼気迫るものがあった。白っぽくて長い髪を後ろにくくつたたくましい四肢を持つ彼女は、女性でありながらとても

も強そうだ。その女性に迫られるとともに怖い。

「すみません、もうひとつ事情を詳しく説明していただいても？」

内心でビビりながら言えば、四人は我に返ったようだつた。
最年長つぽい髭の推定魔法使いがこほんと咳払いをして説明を始め。

「実は、我々は魔王を倒すといつ使命のために世界のあちこちを回り情報を集めておつた。強敵もあるだらうといつて国でも最強と謳われる者たちを集めたわけじゃ」

「おお、まさにいかにもな話だ。見た感じ、リーダーが剣士でマッチョが格闘家、髭が魔法使いで女性がアマゾネス、じゃなかつた、弓矢使いだらうか。そんな感じつぽい。」

「皆戦いにおいては右に出るものがおらぬほど優れておるのじゃが……それ以外はとんと苦手でなあ。特に料理などは誰一人としてできん」

その言葉に他の三人がうなづく。

「情報収集といつても町が中心じゃから、宿や酒場での料理がある。町から町への移動の際は野営が主じやが、それでも今まで耐えておつたんじや」

ならこれからも耐えてください、といつ言葉を私は呑み込んだ。
私は空気の読める女。今はそういう雰囲気ではない。

「じゃが、最近とうとう魔王の居所を突き止めてな。今は魔王を倒

すべく魔王城へと向かっておる最中なんじや」

魔王がいることは魔物もいることなんだうけれど、周囲を見回しても「ぐくく普通の森にしか見えない。

「魔王城は近いんですか？」

「下に勇者」一行は固まつた。
アマゾネスがため息をつく。

「魔王城に行くには、ある道のりを決まつた順に歩かなければならぬの。洞窟を抜け森を抜け、山を登つて地下にもぐり、もつ一度山を登つて森をひたすら歩く必要があるのよ」

「いぶんと面倒くさい手順を踏まなければならぬようだ。ああ、だから」今まで魔王城へ行くための情報を集めていたのだろうか。

「田数にておおよせ」田田、ね

言つた途端、彼の間でざわつとした雰囲気が漂つ。

「ちなみに今何田田ですか？」

「五十田田だつ

苦悶に満ちた声で筋肉だるまが言つ。
なるほど。つまり、

「いい加減、まことに食つあきた」と
「その通り」

リーダーのりつちゃんが力強く叫ぶ。

「じゃあなんで同じ世界の人呼ばないんですか？」

「召喚は規模がどうしても大きくなりがちだから、同じ世界の人間は近すぎて呼べないんだ」

りつちゃんはしょんぼりして言う。隣の家に行くのに新幹線を使うようなものだらうか。そりや呼べない。

「や、でも私料理は出来ますが調味料とか食材がありませんし」

と言いかけてはつと思ひだす。自分が手に何を持っているのかを。スーパーで一週間分の食料を買いだめしたばかりなのだ。

「…………食材はともかく、調味料がありません」

私の持つている食材は野菜中心で、玉ねぎかぼちゃ、ピーマンなすび、あとねぎとキャベツ。それから牛乳と野菜ジュースだ。あと少々のお菓子。

「それならば問題はない。異世界からの壁を越えた人間には、一つ能力を付加することができる」

なにそれカッコイイ。

私は一瞬期待したのだが、

「お主には思つてまつま調味料と水を出す能力を授けた」「使える範囲狭すぎない！？」

どうせならおいしい料理が出せる能力とかでいいじゃん。なぜに

そんな中途半端な。

「これでも最大限の付加じや。授けられる能力にはかなりの制限があるんでな」

偉そうに威張つてますけど、どれぐらいすごいか異世界人にはわかりかねます。

「勿論、報酬はお支払いする」

「つちちゃんが戸惑つている私に言つ。

「でも通貨違いません?」

報酬と言えばマネー。もしくは現物支給であるが。するとおもむろにつちちゃんが布袋の中から物をとりだした。彼の掌の上にあるのは、大粒の宝石。

「倒した魔物から得たものだが、今の我々には必要ないものだからな」

「その話、乗りましょう」

一いつ返事で快諾すると、一行からも快哉が上がった。

と、いつわけで。

今までしがない家事手伝いだった私は、その日から現実と異世界を行き来しては勇者一行の料理を作つては宝石を貰うという期間限定アルバイトを始めたのだった。

勇者一行が魔王を倒したころには、私はすっかりお金持ちとなつていた。

嗚呼素晴らしいかな、異世界召喚！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6887o/>

家事手伝い、異世界へ行く

2010年11月4日13時32分発行